



渋沢栄一の生家

## 深谷にて



日本海ガス株式会社 代表取締役社長

新田 八朗氏

にった はちろう

一橋大学経済学部卒業。東京で金融機関勤務の後、日本海ガス入社。2000年1月から代表取締役社長。30代には青年会議所活動で日本中・世界中を飛び回り、1998年に第47代日本青年会議所会頭を務める。

あるNGO主催のコンベンションが埼玉深谷市で開催され、主催者には申し訳ないが会議自体より深谷が渋沢栄一の生まれ故郷だからという理由で参加した。

JR深谷駅に着いて早速渋沢の生家に向かった。江戸時代末期の一八四〇年に栄一が生まれたのは武蔵国榛沢郡血洗島村、現在は深谷市血洗島。なんとも想像力を掻きたてられる地名である。栄一の生家は良く保存されており、豪農であった当時を思い起こさせてくれ、感慨深い。

渋沢栄一の生涯は、「血氣盛んな攘夷・討幕活動家↓徳川慶喜の家臣↓慶喜の弟・徳川昭武の欧州歴訪随行者↓維新政府の高官↓民間の企業家」という波乱万丈のものであった。三十三歳にして野に下つてからは、第一国立銀行の頭取を務めるほか五百社以上の会社の設立・経営に関わった。銀行による資金供給の仕組みをつくり、鉄道や港湾など物流のインフラをつくり、鉱山を開発して製造業発展の基礎をつくる。こうして渋沢は日本資本主義の父と言われるようになる。渋沢が提唱・実践した「合本主義」では、会社の目的は国を富ませみんなを幸せにすること、即ち公益の実現である。そのために株主と企業家は「信を通わせて」資金を提供しそれを活用する。事業継続のためにはもちろん

利潤が必要であるが、その意思決定はプロキシファイトによる多数決などではなく、道徳やモラルによって為されなければならない。「論語と算盤」と言われる所以である。

アベノミクスが喧伝され、ほんの数年前のリーマンショックの教訓やそれに伴う世界的金融危機も記憶の片隅に追いやられようとしている。あの事件は制度疲労した「英米型資本主義」という妖怪」が行き着いた無様な終着点ではなかったか。怪しげな金融商品が跋扈し、プログラムされたコンピュータが瞬間に膨大な株取引を実行し、株価は乱高下する。株主価値の最大化のみが求められ、資金の出し手と受け手の間に信頼も尊敬も誇りも存在しない。

さらに残念なことに、いまの資本主義は多くの人を幸せにできていない。エコノミクスとはギリシャ語で「共同体のあり方」を意味する。つまり、みんななどのように生きたらみんなが幸せになることができるか、ということだ。それを発端として経済学という学問が生まれたはずだ。いま経済学は原点に戻って資本主義の再構築に貢献するべきであろう。そこにおいて渋沢栄一の「合本主義」は示唆に富む。

深谷への旅は偉大な企業家の足跡に思いを馳せ、経済人としての自らのあり方を問い直す良い機会となった。